

## わたしたちに代わって

本日は教会の暦で終末主日、一年の終わりの主日です。教会学校では収穫感謝日としてまもられるこの日は、本来、魂の刈り入れを思う日、やがて主の前にみずからの蒔いたこと、刈り取ったものを携えて立たねばならない日、審判を想起する日です。「わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立たなければなりません」（第二コリント5：10）。この日に、わたしたちの教会では「メメントモリ」と称するリビングウィルをお渡ししているのは皆さんもご存じの通りです。そしてこの終末主日に、わたしの終わりを重ね、生かされている恵みを感謝し、それぞれの歩みを整える日に、与えられた聖書箇所が主イエスの死刑判決であったということに、偶然ではないめぐりあわせを感じます。今朝は、裁き主が、裁かれる側に回られたという出来事から、神さまの恵みに与りたいと願っています。

さてもう少し、わたしたちの終わりという視点から話を続けます。実際問題としてわたしたちがどうかたちでこの世を去るかは分かりません。今年は新型コロナウイルスのせいで、こうした話題が身近になり、皆ナーバスになっていますが、終わりの日は神の御手のうちに隠されていて、どうかたちでそれが訪れるかは神様のみがご存じであり、それでよいのです。それは神さまが決定される出来事だからです。大方の願うことはそれが穏やかで、苦しみのないものであってほしい、ピンピンコロリなどという言葉があるくらいですから、死の直前まで元気で、自分のことは自分でやれて気づいたらコロリと死んでいる。死は一瞬のうちに訪れて、死の恐怖を味わうことがないというのが理想ということでしょうか。今風に言うと健康年齢を保たれて過ごし、さっと取り去られるということが多くの方

の希望でしょうか。しかしながら現代では死ぬことは医療の発達もあり、延命だけに限れば胃ろうの処置もありますし、スパゲッティ症候群という言葉があるように体中に管や、装置をつけて生命維持が可能です。死ぬのに決断のいる時代と言った人もいるくらいです。一方でわたしは家族を 59 歳と 48 歳でガンで送りました。また教会員にもそういう召され方をした方が幾人もおられました。余命宣告を受けて死と向き合っ、与えられた命を終えてゆく。そういう終わりの迎え方もあります。いずれにせよ人間は限りある命を貸し与えられて生きる存在ですから、最後は必ず死を迎える。全能で、永遠なお方は神さましかおられない。しかし、その神さまがご自身の独り子を、神の子を、死へと引き渡される。イエスさまは人間の苦しみの究極である死、それをもっとも残酷な仕方でも迎えられたと言ってよい。今日、与えられた聖書箇所を読みましてそう思います。人間が死を前にして味わう不安や、恐怖を凝縮して体験をなさる。自分の弟子たちは裏切って離れ去り、敵意、悪意をむけられ、四面楚歌のなかで、死刑を言い渡され、十字架で死なれる。そのような死を遂げ、陰府にくだり、よみがえられたからこそ、わたしたちに真の慰めと平安を与えうる。ご自身苦しみを受けられたからこそ、わたしたちの悩みや苦しみに思いを寄せることがお出来になる。キリストの受難とは、そのような意味を持つ死でした。しかも今朝、わたしたちに与えられた聖書箇所、イエスさまが迎えようとしている死は自然死でも病死でも事故死でもなく、人間が刑罰として加える死であります。人間、生まれる時と死ぬ時は受け身であり、そのことは人の生き死には神の主権のもとにある出来事だということです。しかし、イエスさまの死はそうではなく、人の思いや意志が介在している死、人が神の主権を侵して特定の人物に死を与えたものです。それ

も主イエスの場合は祭司長、長老、律法学者たちが自分たちにとって都合の悪いイエスを排除しようとして仕組んだ死であります。偽りの証人がたてられ、神を冒瀆する者というレッテルをはられ、死刑と定め、侮辱し、唾をはきかける。これがユダヤのサンヘドリンとよばれる最高機関での出来事です。ただし当時、ユダヤは、ローマ帝国の属州、占領下におかれて自治権が奪われている状態でしたから、人を死刑にする権限をもっていなかった。そこでローマのユダヤ総督ピラトのもとに送られて死刑にしてもらおうとするのです。ところがピラトとて馬鹿ではありませんから、送られてきたイエスに罪がない、ユダヤ人が妬みからおこした冤罪であり、ローマ帝国への反逆者として十字架刑に処すというのは無理があると思っている。ユダヤ人の王か、という尋問は、ローマの支配下においてユダヤ人の王を新しく名乗れば、これは反逆の意志ありという判断も成り立つ。そこでピラトは、そこを尋ねるのですが、イエスさまは「それはあなたが言っていることです」とお返しになるだけです。もうこの場面で、イエスさまは積極的に自分の立場や無罪を訴えて状況を変えようとしてはおられないように見受けられます。ピラトはイエスさまの姿勢に「何も答えないのか。彼らがあのようにお前を訴えているのに」と、このイエスさまの態度をいぶかしむ。この何も答えられない、みずからにかけられた疑惑を晴らそうとしたり、自分の行動の正統性をあげて弁明すること自体を、イエスさまがなさらなかったということは、覚悟のうえで、この異常な事態を受け入れておられるということです。まさしく受難予告で言われていたことが、そのまま実現している。イエスさまにとっては、ですからこれは驚くべきことではない。この茶番劇で示された敵意も、悪意も、憎しみも、嘲りも、裏切りも、そして加えられる暴力も、飲むべき杯

として了解しておられる。ゲッセマネの祈りのときに申し上げたことですが、受難の本質は、神の子が「引き渡される」側に立たれるということにあり、その葛藤は「この杯を取り去ってください」という祈りの戦いとなり、それをイエスさまが、父の御心は動かないと見定めた時点で終わっています。ゲッセマネの祈りのあとの展開は、主イエスにとっては御心を受け入れた末の「結果」でしかない。そう言い切ってしまうにはあまりに無惨で、残酷な展開ですが、サンヘドリンや、ピラトのもとに引きずり出された裁判で、皆がよってたかってイエスさまを貶め、侮辱していく。偽りすら並べ立てて、この方のもっておられた名声をはぎ取ってゆく。それをこの方は耐え忍んでおられる。わたしたちが無遠慮に人格を侵害し、奪い取ってゆくにつれ、そこで人間の残酷さ、暴力衝動、妬み、怒りなどが、思考を停止させて衝動に身を委ねさせてしまう。そうしたわたしたちの持っている醜い部分が、負の側面が、このイエスさまを十字架に追い込んでゆく裁判の中から浮かび上がってきます。人間の罪ですね。こうして人間の手によってくだされる死の、なんとむごく、手前勝手に、理不尽なことか。ピラトもその意味では罪から逃れられません。「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と使徒信条に記されていますが、あれはローマ帝国の行政官としてユダヤ総督をしていた彼がイエスに死刑を宣告できる唯一の存在だったからです。その名が記されることで、イエスの死はフィクションではなく、確かに歴史のなかで起きた事実であると刻まれた。福音書を読みますと、そこはローマ帝国下にあるわけですから、そこそこピラトに気を遣った表現になっています。マルコも、ピラトは何度もイエスを救おうとしたと書いています。しかし結果的に、ユダヤ当局の歓心を買うために、また群衆の暴動を懸念して、それくらいならイエス

を死刑にしてもかまわないという政治的妥協をする。いわばスケープゴート、いけにえとする。こうして人間が、人間を裁く問題性、人間の中にある罪により、正義と公正がねじまげられ、権力が誤って用いられて罪のない神の子がローマへの反逆者として十字架で処刑されることになるのです。

最初に、終末主日は最後の審判を思う日だと言いましたが、その日は神の義による裁きが示される日でした。それはわたしたち人間の用いる秤が本当に歪んでいるからでしょう。真実に正しいことが明らかにされ、公正に裁かれるのでなければ浮かばれないと誰しもが思うのではないのでしょうか。と同時に、神の前で自分の正しさを主張できる人間などいないことにも思い至るのではないのでしょうか。この日が怒りの日と呼ばれ、そのとき罪びとのわたしはどうしたらよいのかと嘆かれるのは理由のないことではないのです。その意味で、ピラトの下で起きたイエスさまにまつわる最後のエピソードは象徴的です。

6 節「ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々の願い出る囚人を一人釈放していた。」そこで、ピラトはこれを利用してイエスを釈放しようともちかけますが、祭司長たちに扇動された群衆はイエスではなく、バラバを！と叫びます。バラバは人殺しで捕まっていた人物です。この男を釈放しろ、という。ではイエスは？いったいこの男はどんな悪事を働いたというのか？そう問うても、人々は十字架にかけろと叫ぶ。バラバを釈放し、イエスを十字架に！それが祭司長たちの、群衆の望みでした。そこでピラトは、彼らを満足させようと思って、人殺しのバラバを釈放し、イエスを鞭で打ってから、十字架につけるために引き渡した、とあります。イエスは神の子でしたが、人々は、人殺しのバラバのほうを選んだ。バラバとは「バル・アツバ」、「アツバ、父よ」の「アツバ」、「テマイの子、バルテマイ」の

「バル」、つまり、バラバの名前は「父の子」という意味なのです。人々は父の子バラバを助けて、神の子イエスを十字架に差し出した。そういう身代わりが最後におきた。死すべき者が命を拾い、代わりに、神の子がその刑罰を身に受けて死なれる。この出来事は、イエス・キリストの十字架の意味を雄弁に語っています。わたしたちのために十字架に向かわれた神の子、それは偽りの裁判であり、世の中の歪みや、権力の打算が透けて見えます。それはわたしたちに真実に正しい方の裁きを待ち望ませるとともに、このようなかたちで主が引き渡されることを通して、人間の弱さ、醜さ、至らなさをあらわにしつつも、そこになお主の忍耐と赦しと執り成しがあつたことを示します。わたしたちに代わって十字架で刑罰としての死を死なれた方が復活してわたしたちの救い主となられたという驚くべき出来事から、信仰の希望をいただきたい。そこからくじけない歩み、たとえ誤解され、理解されず、忘れ去られようとも、主がわたしの味方、弁護者となって下さる真実は動きません。わたしたちの主が、十字架で、わたしのために死なれた事実は変わりません。ここに示された主の赦しの愛を信じて、応答の歩みを願います。

お祈りいたします。